

格闘技界の自由化時代・到来！！

個人より類、高専柔道の本質は、仲間との団結心を育むところにあり

高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

に受けとれました。ちよつと歴史的事実を語ってほしい。まず、六大学野球も戦前からありましたが、高専柔道も、その六大学野球から影響を受けたのではないかと、そんな印象を受けました。この歴史的な事実関係については、ぜひ高専柔道の関係者に聞いてみたいですね。

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

といふことは、限りなく母校に対する愛情を育てますよね。なぜ我が六大学野球に熱狂するかといった、自分が所属している大学が一つの、共同の役割を果たしているから、名前が大学であるから、東洋堂のような学校精神が生まれてくる。そして、その共同の道徳を磨いて他の大学と闘うところに、個人を超えた魂として、情熱が生まれてくるわけですね。

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

ブレインの精神が生まれてくるというところですね。

堀辺 六大学野球のような団体戦技があるおかげで、人々に自分の母校に対する愛が校精神が生まれてくる。それは、見えない部分までやる側についても、同じことであると思えます。だから、個人としての自分だけを、類として人間関係を育むために団体戦は良いし、そういう理由から、私は高専柔道も六大学野球などを意識して、団体戦を始めたのではないかと、そう推測してしまっています。

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

てくるんですよ。たとえは、選手にとって一番重要なことは負けをこととですね。これはどの競技でも同じです。けれど、その負けも、自分個人の負けではなく、自分が負けたことが母校の負けにつながる。そうなんですよ。だから、もう一人、たまりません。

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている

谷川 先生にはすでに高専柔道の技術と精神が、いかに作られていくかは、団体戦に秘訣が隠されている



勝手にいくとこつのは、大喧嘩ごとんですけり。二つとそれにてたわりすやあまりにもキスミスしてゐるよつても強じとれるじやないです。それが眞情れた現代の社会で、高専柔道の学生たちが見せた、何れのために負けないといふ姿勢は、凄く新鮮に感じました。

横辺 高専柔道の大会を見に行つた時に、名大の関係者から、名大柔道部の会報をもらつたんですよ。その中にあるのが、名大柔道部

◎学生が何故柔道にいらあつたか、その理由がいろいろある。その一つは、高専柔道の大会を見て見た時、

は偉大なるアマチュアイズムだれ」と書いてあるわけだ。アマチュアというのは勝負にこだわっていないながらも、勝つたかどうかわりかからえらるわけじゃない。だから、何の報酬もない。何の報酬もないけれど、青春のすへてをふつけていかなければいけないかと思つてあるわけだ。その文章と、高専柔道の大会を見て見た時、

私は「なるほど」と思つた。そのアマチュア精神が、大会と軍事に合致してゐたのを見た気がしたんです。そして、このアマチュア精神というのは、武道精神にも通じるところがあるんですよ。武道精神というのは、勝つたかどうかわらなければならぬ。しかし、勝つたかどうかわりすぎず手段を選ばない闘い方をしてほしい。そして勝つたからといって、何か報酬があるわけではない。このアマチュア精神という言葉を書かれています。まさに武道精神なんです。

谷川 高専柔道の試合というのは、徳田先生が好きで「修身成仁」という言葉そのものですよ。

横辺 そうです。それが団体戦の中で、実情に表れていて、ちやうどシユートイングの中非選手が母校の北大が出現するということだ。応援にかつていました。中井選手が試合というものは、パトリ・トワートの大会を見て、非常にリラックスして、構いように聞かうタイプです。ところが、高専柔道の大会では、一番前の席を陣取り、まるで自分の試合の時以上に必死になつて、真実な顔をして声援を送つていた。その姿を見た時は、非常に新鮮なんだと思つてました。

谷川 ハイ、ハイ。

横辺 これは決して中井選手に限つたことではなくて、高専柔道をやつてゐる人たちの、母校や仲間、先輩たちに対する共通した感覚なんです。それがまた、現代社会に一番欠けている感覚でもあつてますよ。

谷川 現代社会は、疲れてはいんだという個人戦をやつてゐるふうに見えますからね。

横辺 ええ、そういつた現代社会のアンチテーゼとしても、高専柔道は面白かつたといふことです。

私はグレイシー柔術を見た時、一番最初に関じたのは、家族家といふ共同の理由による強さだった。グレイシー柔術のための死ねる」と言つたホイスの言葉に感服されるように、個人以上のものを背負つて闘つてゐる彼らの姿に感動したわけですよ。それと共通する精神が、高専柔道の団体戦にもあつたといふことです。

谷川 なるほどね。

横辺 だから講道館柔道をやつてゐる人に言いたいのは、高専柔道のことをムーンが違ふかといつて白視してもらいたくないといふことです。なぜなら柔道の創始者の義経師範が求めていた、柔道を通じての人間形成を、高専柔道の大会ではしっかりと学ぶ場になつてゐるわけですか、あれを否定することは、高専柔道の原点にもとつてみて、あつてはいけないんじゃないかと思ふ。

谷川 もし、あらゆる意味で高専柔道は、講道館柔道のアンチテーゼになつていますね。

横辺 ハイ、だからそれを受け入れるだけの大きな度量を見せてもらいたいですね。今や柔道はオリンピックの競技になるほどの存在なんですから。

谷川 そうですすね。

横辺 だから、自分なんかむしろんを意味で感動しましたよ。グレイシー柔術が出てきて話題となり、柔の極意はあつたかグレイシー柔術にしかなくいよつて思われていた状況があつた。その中で、戦後一回もスポットが当たらないのに、ずつと細々とつてきた武道物を柔道があつた。これは本当に素晴らしいことですよ。光が当たることは素晴らしいことですよ。光が当たるにつれて、光が当たらないからといって悲観に陥らずにやつてきた高専柔道の人たちに、本日の武道精神を感じます。だから、佛法の道場生にも言つたんですよ。光が当たる道でたらない関係なく、自分がこつたと感じた理想を追求していこうじゃないかと、光が当たらないくても誇りをもつて。一日一日の稽古内容の充実、そして高専柔道の人たちが示してくれた人間関係を真実に考えていこうじゃないかと、大会が終わつた時に話し合つたんです。

谷川 そいう地獄なところを真別にやつていくことこそ、本物なんですすよ。

横辺 ええ、今回こうやって高専柔道に出合つたことであらためて感じたのは、世間の人がグレイシー、グレイシーと言つてゐる中で、もう一度自分の足元を見つめ直す必要があるんじゃないかと、いふことです。技術もそうだし、こうした武道精神もさう。我々の身置にあるものの中に、たとえ大げさな大つてあつてもやぶるべきものはたくさんあるんじゃないかと、さう感じました。私がグレイシー柔術をこれまで拝聴してきたのも、グレイシーを拝聴し、感じてきたのが究極の目的ではないんですよ。グレイシーの人たちが武道の試合がてきものになせぬ日本八にそ

れがてきないのか。ヒクソンにナムツイの精神が宿っているとされるのに、なぜ我々日本人から武道精神が失われていると言われるようになったのか。これが一番自分が言いたかったことなんです。

格闘技を見る目を養うためには、攻撃側ではなく守る側を主眼として見てほしい。

谷川 それと先生、先ほどから高専柔道は引き分けるための柔道という話かてていますね。それで僕は感したんですが、あの高専柔道の会場の雰囲気って、とても良かったですよ。なぜ良かったかというところ、団結心があったのも大きな理由なんですけど、みんな物凄く柔道の技術を見る目をもっていたと思うんですよ。どうしてこんなに見る目をもっているかということ、負けない技術、引き分ける技術を知っていたからだと思います。だから、格闘技の試合を見る目を養うためには、攻撃に着眼点をおくのではなく、ディフェンスを見ていけば、よりわかるんじゃないかと、観客論の立場からもちょう

思ったのですが……。

堀辺 これはやる側の立場から言ってもそうなんです。今のスポーツ的な格闘技は、すべて攻撃する勝ちにいく立場で技術が追求されています。しかし、本当の武道的な発想はそうじゃないんですよ。まず、やられないようにするにはどうしたらいいかという発想で技術を学び、やられないようにするにはどうしたらいいかという気持ちで試合に臨みます。見る側もそこを中心に見ていくと、技術が覚えやすいんです。

谷川 高専柔道の大会を見ていても、やられそうになった時にうまく防衛したり、逃げることできただけで歓声があがってましたよね。普通はどうしてもハデな攻撃に目がいってしまっているが、彼らは守ることを中心に見ていた。これはシヨックだったんですよ。技術を覚えるのは攻撃ではなく、いかに守るかから入るべきなんだな、と。だからあの会場にいた観客は優秀だったんだ、とあらためて思いました。

堀辺 それはね、武道というのは



本来勝つことが目的ではなく、自分の身を守るためにあるからです。そのことが、高専柔道を見ている人たちにわかっていったということですよ。だから、体が返っただけで、ワァーと歓声が沸き上がっていたんですよ。

谷川 もう女子の部員らしき人が「ワチをしめて」とか、「襟に気をつけて」とか、「帯、帯」と声援してましたしよ。もう驚いてしまったんですよ。あの声援は明らかに守る方法を知っている声のか

○個人戦のイイシーンが格闘技で、こういうシーンはめずらしい

け方でしたよね。だから、柔道の試合は、こうやって盛り上がりが出ていくんだというヒントがつかめた気がします。

堀辺 そうそう、逃げた時に一番声援があった、ということは、明らかに守る方に主眼を置いた見方をしているということですね。これはグレイシー柔道にも共通しているんですよ。

谷川 ああ、そういえばそうなんです。金網のオクタゴンの外にいる家族の人たちは、ホイスが守っているところを冷静に見ながらアドバイスを送っています。それで「大丈夫だ」という顔をしたり、「ゆっくり、ゆっくり時間をかけろ」とアドバイスしていました。グレイシーの人たちも、守る方を重視して技術を見ますよね。

堀辺 そもそも柔道の柔は、女性原理ですからね。身を守る、受け手の発想から技術が体系づけられているんですよ。それを正面から、いかに攻めるかという目で見てい

たらわからないし、面白くないはずですよ。

谷川 そうなんですよね。だから格闘技の人には言いたいのには、いかに自分の身を守っているか、ディフェンスの方を中心に試合を見てくたさいということですね。そうすれば、格闘技の技術はもっとわかるようになるし、試合が面白くなるはずですよ。何でも有りの試合でも、K-1やキックの試合でも、どうやって相手の攻撃を守っているか、そこが大切なんです。と、言いたくなりました。

堀辺 本場にその通りです。たしかにホーストのハイキックは誰が見ても面白い。タイソンのパンチも凄い。けれども、修行という点から考えても、本当の熟練度はディフェンスに表われるんです。そこを見てもらえれば、格闘技の試合が面白くなることは絶対に間違いないと思います。

谷川 いやあ、僕らも取材する時は、あらためてそこを中心に見ていかなければならないと思いましたが、